



自分のこと！

そのだ ひさこ

昨今、自分の生きている時間は「あと、どれくらい？」という思いがしきり。昨年、お世話になった方や知人が70歳代で何人も亡くなられた。明日は我が身かと。福岡西方沖地震の時は救急隊に知らないうちに命助けられ、がんも何とかクリアした。肩鞆帯(じんたい)の断裂も平成25年に日本でやっと解禁された最新の手術を受け、箸やペンが持てるようになった。

…今まで何度も人に命を助けられ、今の私がある。

18年前は絵本「いのちの花」の日本語版を出した。昨年英語版をやっと出した。二度の出版でいろいろな困難があり、日本社会で部落問題のタブーの深さがさらに身に染みた。人類の惨劇を描き続けた丸木俊さんの『いのち』あふれる絵は日本の遺産だと私は思っ

● 問い合わせ先 教育政策課 人権・同和教育担当

ている。私の絵本の詩は部落問題のタブーの深さ、言葉の不自由さへの私自身の挑戦でもある。

そして生きている今、自分のもう一つの大切な課題は女性差別の問題である。部落問題を教育が採り上げて40数年、女性差別の問題はもしかして、まだ採り上げられてさえないのかもしれない。性の問題は自分の『外』の問題のように対象化しにくく、問題にしにくい。私たちの被害・被差別の歴史は長く、差別されてきた側のゆがみは深い。男たちも差別してきた側として自分を十分ゆがめてきている。その双方からの回復・解放はきつと大変な困難であると思う。

自分の娘を虐待して「殺し」にまで至ってしまう父親。子どもを道づれの母親の自殺(!?)。女性に暴行し、命を奪った若者も。性の問題は私たちの存在の根っこを深くつかんでいる問題である。多様な性も含めて何びとも何らかの形

で、性がない人はいない。自分の問題である。

性の関係は、一方ではプライバシーであり、それぞれに自由であるが、他方ではそれまでの歴史(刷り込み)の影響を受けていない関係は存在しない。

日本社会は徳川幕府の遊郭の公認からカウントしても、遊郭制度は遊郭、貸座敷と看板(名)を変えて戦後13年後まで続いた。女は後継ぎを産むものという家制度下の女と、決して産んではいけない遊郭制度下の女とに数百年分けられてきた。明治以降、西日本を中心にアジア各地(だけではない)に売られていったたくさんの少女たちもいた。

旧約聖書の初めに「人ひとりなるはよからず」とある。男と女がいることの自然さと感動が書かれている。人間の性は互いを思いやる深い優しさにもなり、いつの日までもいのちを削りあうことになる人間の根っこである。

「広報ちくしの」掲載広告を募集します

広告掲載料、申込方法など、詳細は広告取扱代理店に問い合わせください。

● 対象号 平成31年5月1日号～平成32年4月15日号の24号

● 発行部数

41800部(4月現在)

● 平成31年度広告取扱代理店

株式会社ホープ

☎716(1404)

● 広報紙についての問い合わせ先
秘書広報課



裏表紙に広告掲載枠があります